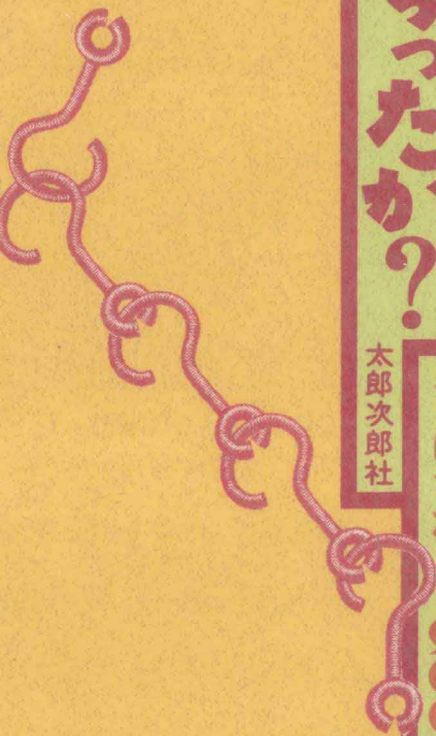
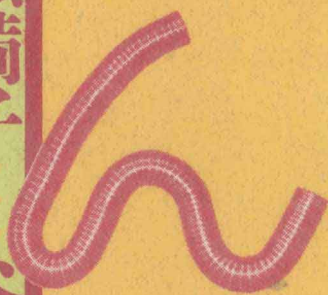
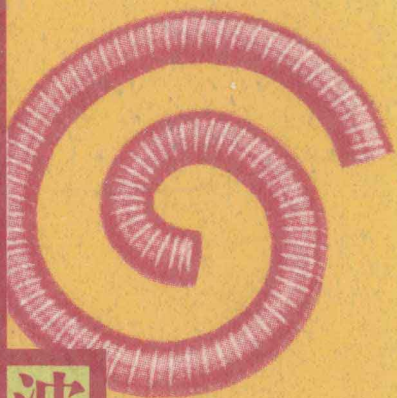


かっぱ、かっぱらったか？

太郎次郎社

波瀬満子
谷川俊太郎

ことばをあるく ●●●●● 日



かっぱ、かっぱらったか？

太郎次郎社

二匹なぐちむく 6000日

波瀬満子▽▽谷川俊太郎



かっぱ、もっぱらったかい？

ことばをあるく●●●●日

一九九六年六月十五日 初版印刷

一九九六年六月二十五日 初版発行

● 著者……………波瀬満子

谷川俊太郎

デザイン……………杉浦康平・十佐藤篤司 協力……………副田和泉子・大西久美子

イラスト……………北山理子

写真……………戸張隆宏・トビシ十川 島 浩（全巻）

発行者……………浅川 満

発行所……………株式会社太郎次郎社

東京都文京区本郷五―三―一七 千一三

電話〇三―三八一五―〇六〇五 郵便振替〇〇―一五〇―二―一三七八四五

編集……………北山理子（らせん企画）十三上宥起夫

印字……………株式会社コーヤマ十株式会社プロスタディオ

印刷……………株式会社平河工業社十株式会社文化印刷

製本……………渡辺製本株式会社

定価……………カバーに表示してあります。

● ISBN4-8118-0806-1

©Mitsuko HASSE+Shuntaroh TANIKAWA 1996

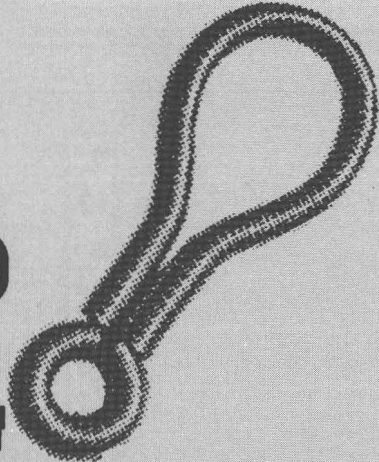
波瀬満子▽▽谷川俊太郎

かっぱ、かっぱらったか？

太郎堂社

こぼれをあらく ●●●●日

【目次】



I

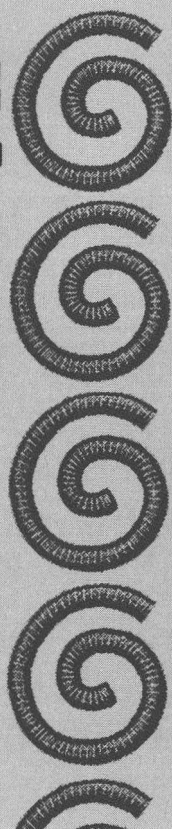
声をもとめて

.....8

ことばの声.....10

詩人と俳優の朗読合戦.....50

時のながし.....93



Ⅱ 意味をはなれて……………112

詩のリサイクル……………114

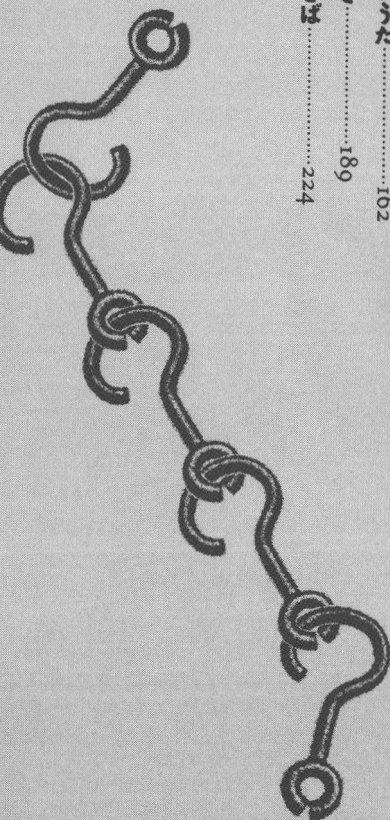
水をめぐる現体制下の座談会……………135

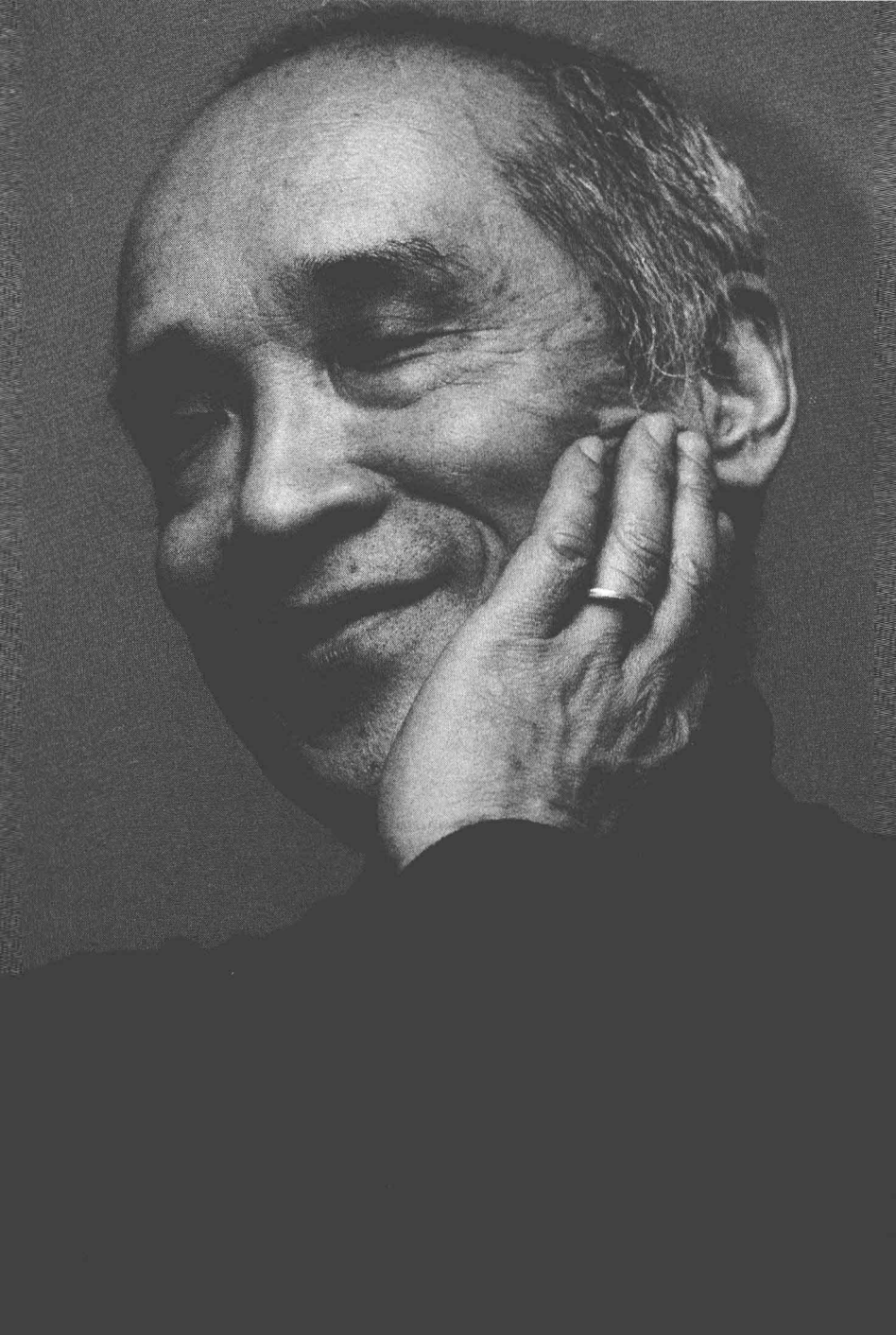
Ⅲ 「あいうえお」のほうへ……………160

ことばあそびうた……………162

かつきくけつ……………189

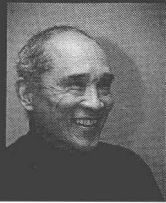
共鳴するうた……………224



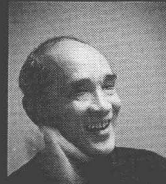




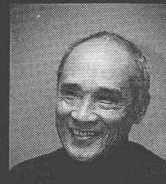
13 KODAK 5063 TX



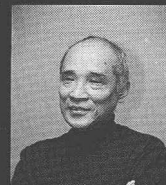
14 KODAK 5063 TX



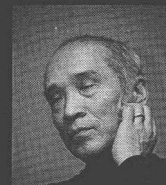
15 KODAK 5063 TX



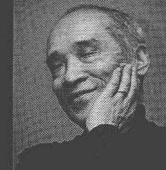
16 KODAK 5063 TX



17 KODAK 5063 TX

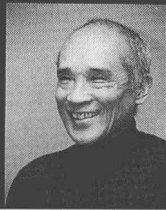


18 KODAK 5063 TX



13 19

KODAK 5063 TX



14 20

KODAK 5063 TX



15 21

KODAK 5063 TX



16 22

KODAK 5063 TX



17 23

KODAK 5063 TX



18 24

KODAK 5063 TX



19 25

KODAK 5063 TX



20 26

KODAK 5063 TX



21 27

KODAK 5063 TX



22 28

KODAK 5063 TX



23 29

KODAK 5063 TX



24 30

KODAK 5063 TX



25 31

KODAK 5063 TX



26 32

KODAK 5063 TX



27 33

KODAK 5063 TX



28 34

KODAK 5063 TX



29 35

KODAK 5063 TX



30 36

KODAK 5063 TX





2
KODAK 5063 TX
1A



3
KODAK 5063 TX
2A



4
KODAK 5063 TX
3A



5
KODAK 5063 TX
4A



6
KODAK 5063 TX
5A



6A
KODAK 5063 TX



8
KODAK 5063 TX
7A



9
KODAK 5063 TX
8A



21
KODAK 5063 TX
9A



22
KODAK 5063 TX
10A



23
KODAK 5063 TX
11A



24
KODAK 5063 TX
12A



1
KODAK 5063 TX
1A



2
KODAK 5063 TX
2A



3
KODAK 5063 TX
3A



4
KODAK 5063 TX
4A



5
KODAK 5063 TX
5A



6
KODAK 5063 TX
12



7
KODAK 5063 TX
7A



8
KODAK 5063 TX
8A



9
KODAK 5063 TX
9A



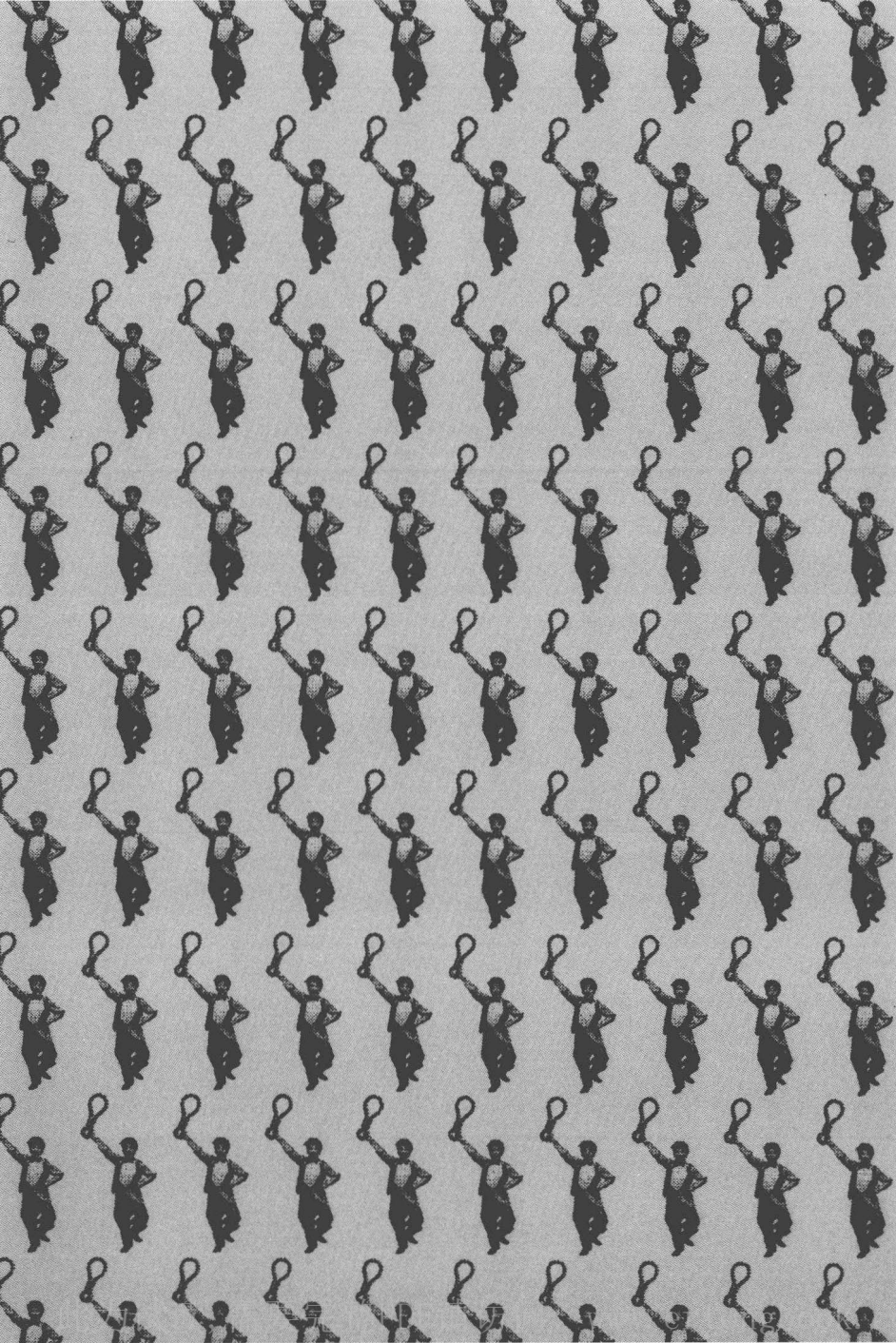
10
KODAK 5063 TX
10A



11
KODAK 5063 TX
11A



12
KODAK 5063 TX
12A



声をもとめて



氣取つたといふ傳説
機園駐在所見物
……
……

[illegible]

あつた。そのとき、
あつた。そのとき、

ふんばる風

ある日突然、ことばがあふれてきた

波瀬

谷川さんとごいっしょにお仕事させていただくようになって、どれくらいになるかしらって数えてみたら、もう四分の一世紀。長いですねえ。

すねえ。

谷川

ほんとね、長いよねえ。それだけいろんなことがあったってことだけど。じつはね、ぼくもあらためて考えてみたの。

波瀬

なにをですか。

谷川

あなたの仕事のことですよ。ざっと考えただけでも、『やってきたアラマせんせい』『あたしのあ　あなたのア』『スーパ―A-I-U-E-O』というのが思い浮かぶよね。初期のころの「詩のながし」なんて時代もあるし。そう考えると、波瀬満子のファン層というか支持基盤って広いんだなって感心したんですよ。

波瀬

いろんなことに首を突っこんだことはまちがいないし、谷川さんという存在のおかげもあって、ちよつとは世に知られているというの
はたしかなんですけど……。

谷川——齒切れがよくないね。いろんなところにファンがいるっていうのは、ある意味で実力のあかしでしょ。あなたの場合、大人から子ども、それに障害者までだから、これは大変なことですよ。

波瀬——だけど、私の場合、それぞれの支持層が独立していて、ある支持層の人は、私の仕事のほかの部分に興味をもたないというか、一面しか知らないというようなことがあるんです。つまり、「詩のながし」の波瀬満子と『アラマセンせい』の波瀬満子はいっしょじゃないっていうような。だから、一般的にいわれるような、支持層が厚いというのともちよつと違う。

谷川——「波瀬満子」ということで一つにまとまらないんだ。

波瀬——そう、分裂したままなんです。

谷川——あなたのなかに、それを許容するものがあるのかもしれない……。だけど、さっき、いっしょに仕事しはじめてから四分の一世紀なんて言ってたけど、そのわりにぼくはあなたのことを知らないのね。とくに、出会う以前のあなたのことは、ほとんど知らない。このさいたから聞くけど、あなたはもともとなんだったの(笑)。

波瀬——なんだったのって、もともと人間でしたよ。職業でいえば女優でした。

谷川——いつごろから女優になりたいと思ってたの。

波瀬——それはもう、ほとんど小学生のころからというか……。

谷川——そんなに早くから？ どうして役者になりたかったの。

波瀬——じつは私、生まれは関西で、父が亡くなって東京に来て小学校にはいったんですけれど、それまでの私は、京都の菓子のお嬢さん（お嬢）の老舗「銘屋」のお嬢さん（お嬢）だったんです。それが突然、母子家庭になってひねくれてもいたんでしようし、京都弁をからかわれるので、すごく無口で内向的な子で、しゃべらなかつたんです。ちよつと考えられないでしよ。ことはコンプレックスというのが、そのころからあるんです。だけど、童話なんかの本はいっぱい読んでいて、だから、おしゃべりじゃなかつたけど、ことはがいっぱい頭のなかにあった。

それで、ある日、先生が来なくて自習時間になったとき、なぜかわからないけどみんなでお話ごつこしようってことになって、私、話をしたんです。いっぱい本を読んでいたの、きつとしやべりたくてしようがなかつたんでしようね。ぜんぜん意識はしなかつたんだけど、突然ことはあふれてきて、バツツてしゃべつたら、これがうけた。

谷川——ああ、ああ、小学校一年で、もう観客にうける快感っていうのを覚えたわけね。

波瀬——快感って、そこまでは行ってないですけれど（笑）。とにかくそれ

谷川

以来、先生がいなくなると、「お話、お話」ってみんなからせがまれるようになったの。私、童話よりもめちやくちやな作り話が得意で、「きょう外へ出たら、なんか転がってきて……」とかでたらめ言うんですけど、それがうけるんですよ。だから、私はそれで救われたという面がありましたね。快感を覚えたというよりは、すごく内気だったのが、「お話」がうけることでバランスがとれたんです。それはおもしろいね。

波瀬

だけど、女優になろうとはまだ……。東京女学館の中学生時代あたりからかな、選抜肢に女優というのがはいってきたのは。演劇部にはいつて、そのころには『虞美人草』を脚色・演出してましたから。それから東女（とんじょ東京女子大学）にはいつて、はいったときから、もう頭のなかは演劇だけ。ぜんぜん勉強してない。

ところが、あそこは女ばかりでしょ。宝塚みたいに男役やらされるの。戯曲って、そう、女ばかりのって、ない。長い髪をたばねてひつつめてピンでとめて、「ぼく」とか「きみ」とか。のちに私、「ピノキオ」や「にんじん」が当たり役になったんですけど、あのころ男役やってたおかげだと思う。ともかく、女がやりたいと思って、慶応・早稲田・東大とかの演劇部に出向したんです。ゴースキーや三

島由紀夫や創作劇なんかをやって、やっとヒーローならぬヒロインになったんです。あのころ、三つの大学の演劇部のかけもちやってたから、けっこう忙しかった。

谷川——勉強しないでね。

波瀬——なーんにもしない。授業には遅刻するし、ノートひらいて居眠りばかり。それで有名だった。

谷川——それで卒業したわけ。いい時代だったね笑。

波瀬——頭がいいんじゃないですか。

谷川——頭がいいんじゃないよ、いい時代なんですよ笑。演劇やるために東女にはいったわけね、ようするに。

波瀬——それは結果論で、東女にはいったのは、小説家になりたかったからですよ。

谷川——えーっ！　なんか気が多いんだね。

波瀬——いえ、結果的に大学時代は演劇一筋でしたけど、女優になろうとはつきりは思っていなかった。文学が好きだったんですね。きつと、小説家になるには、まず日本文学をお勉強しなくちゃ、と思ってたんでしょね。

